



クルンツィス、もう一つの手兵(SWR響)の定期

マーラーとR.シュトラウスを指揮

客席から花束を受け取るクルンツィス ©SWR / Patricia Neligan.



マーラー「9番」が終わって客席に語りかけるクルンツィス。このあと20分後にアンコールが演奏された ©中東生

「南西ドイツ放送交響楽団(SWR響)音楽監督として2シーズン目を迎えたテオドール・クルンツィスが、ドイツ・シュトゥットガルトのリーダーハレで指揮する定期公演を聴いた。12月13日はマーラー「交響曲第9番」。美しい弱音が粒ぞろい、コンサートマスターのイェルモライ・アルビケルは細部まで気をくばった演奏がロマンティックで光ったが、弦楽器全体で大きく膨らませたものの、ヴォリュームが出ない。第2楽章はリズムを強調した鮮やかさがクルンツィスらしい。テンポを変えるときは操りかたが、SWR響はうまくいった。第3楽章のヴィオラ首席奏者の演奏も美しい。第4楽章になって、とくに低音でよう

やく弦が美しく歌い始めた。クルンツィス節が効いて、管楽器の音が立て続けに割れても集中力を保ち、曲が終わったあとでも沈黙が続いた。

鳴り続ける拍手で3度目に舞台上に戻って来たとき、マイクを持ち、「マーラーの「9番」は(古典)音楽の終わり、現代曲の始まりと言われ、このあとにアンコールをするのは危険なことだけれど、聴きたい人は20分後に集まってください」と誘った。半信半疑でホールに戻ると空席はまばら。暗い客席の合間に、スポットライトに照らされた4台の譜面台を設置し、第1、第2コンサートマスターが譜面台を回り、1ノの曲を美しく演奏した。

2月14日はR・シュトラウス《死と変容》とマーラー「交響曲第1番《巨人》」。《死と変容》は人生を懐かしむような楽想の部分は美しかったが盛り上がり欠けた。続くマーラーは以前と同じく、彼自身が作曲したかのような確信を持って振る。第2楽章のワルツも自由で自然。第4楽章は本物の嵐のようで、ppが続く部分はノスタルジーがこみ上げる。そのままラスト・スパートでスリリングに終わった。このあと彼らは同プログラムでヨーロッパ・ツアーに出ている。

この日も終演後20分からアンコールが始まった。楽団員によると、クルンツィスはライブ録音などのために集中できず、機嫌が悪いのとことだったが、楽屋では満足気だった。

取材・文 中東生